高学歴・少子時代の母親のアイデンティティ

静岡大学教授　馬居政幸（うまい まさゆき）

専業主婦の憂鬱

①「もし、おれが家で仕事していなかったら昼ごはん一人だよね、つまらないね」「そうよ、つくる気もしなくて、朝の残り物ですませたり、ほかほか弁当を買う主婦の気分、わかるでしょう」

これは急ぎの原稿書きで自宅でワープロをたたき、何年かぶりに昼食を妻と二人で食べる機会があったときに、ふと出た私の言葉とそれに対する妻の応答です。ただし、現在のことではありません。今から約一〇年前の一九九〇年、四九年生まれの私が四一歳、三つ下の妻が三八歳のときのことです。

八〇年代半ば、思春期をもじった思秋期という言葉がテレビドラマとともに流行語になりました。団塊の世代の女性、とりわけ専業主婦となった女性の子どもの手が離れた後の漠然とした不満と不安（アイデンティティのゆらぎ）を表現すると理解されました。団塊の尻尾を夫にして、四人の子どもを次々と生み育てたため、少し時間のズレはあるものの、私の妻もまた三食昼寝つきと揶揄された子育て後の専業主婦のあり方に疑問を抱くことにおいて、例外ではありませんでした。

それから一〇年、事情は変わったでしょうか。それを考えるヒントとして、私より一世代年下の友人のパートナーのNさんの言葉を紹介します。

②「仕事をやめて専業主婦になったんですから、絶対に失敗できません」

③「子どもができて最初に悩んだことは、友だちがいないことです。近所に小さな子どもをもったお母さんが一人もいなかったからです」

②は先の妻との会話が交わされた同時期に、仕事の打ち合わせで友人宅を訪問した際、生まれたばかりのお子さんをあやしながら語られたNさんの言葉です。正直、驚きました。一世代年下の女性から母としての使命感のような言葉を聞くとは思ってもいなかったからです。そして心配になりました。四人の子どもとのつきあいから、子どもは親の思いどおりには育たないことを日々経験していたからです。Nさんが有能な編集者であったことを知っていたため、当然仕事を続けると思っていました。それが自ら進んで専業主婦になり、仕事と同様に（というよりは仕事にかわって）、子育てにかかわろうとしているわけです。その思いの強さが育児不安に繋がらなければよいが、と願ったことを覚えています。

実際にはどうなったでしょうか。やはりといえば失礼になりますが、予想はあたったようです。今年、家庭教育に関するシンポジウムで、子育てサークルの代表となったNさんとシンポジストとして同席する機会がありました。そこでNさんが語った話の冒頭の言葉が③です。ご自身の体験をふまえ、孤立した母親がアパートの一室でわが子と向き合う不安の深さをもとにした子育てサークルによる母

親支援の重要性を訴えるNさんの話は、会場に集まった若いお母さん方の共感をえました。母親になったばかりのNさんを知る（不安を抱いた）者として、より深い感動を抱きました。ただ、私と妻と子どもたちとで模索してきた世界との違いにも気づきました。

私の妻もまた大学卒業後、教師をしていたため、仕事→結婚→子ども→離職というキャリア（？）コースはNさんと同じです。しかし、Nさんのような使命感にも似た母親としての自覚（気負い？）を妻に感じたことはありません。後に紹介しますが、離職の原因も異なります。コースは似ていても、その変化の原因や子どもと夫へのかかわり方、何よりも妻、母、さらには一人の女性としての自己認定（アイデンティティ）において異なる面があるようです。この違いにこだわることから本稿の課題に答えていきたいと思います。理由は妻とNさんの間にある一〇年という歳月こそ、女性の高学歴化と日本社会の少子化が同時進行する過程であったからです。すなわち、団塊の世代に続く妻と異なり、私より一世代年下のNさんの世代こそ、高学歴で少子時代を生きる女性の最初の世代だからです。

二つの少子化

日本の少子化は最近始まった現象ではありません。第二次大戦後のベビーブーマーとして四九年生まれの二七〇万人をピークとする団塊の世代が生まれたあと、出生数はわずか一〇年で一六〇万前後まで減少します。正確には減少させたというべきでしょう。さまざまな施策やキャンペーン等を通じて意図的に出生数を減らしたためです。そのことを端的に示すのが、一人の女性が生涯に産む子どもの数（合計特殊出生率）の減少です。四九年に四・三であったのが、一〇年後には二・一と半減します。その後、団塊の世代の成長とともに親の数が増え、出生数は七三年の二〇九万（団塊ジュニア）

に向かって増加します。ただし、合計特殊出生率は人口が再生産されるために必要な二・〇八（人口置換値）とほぼ同率で推移します。日本の家庭は六〇年前後を境に、二人っ子の時代になったわけです。

そのため、六〇年を境とする少子化（少産化）は、現在の少子化と異なり、人口政策の成功例として称賛されました。ところが、八〇年代に入るころから再び特殊出生率が下がり始め、八九年の「一・五七ショック」をへて昨年の一・三八と人口置換値を大きく割り込みます。少子化が国の基盤をゆるがす問題とされる理由です。この二回目の特殊出生率低下に対して、当初、一人っ子の時代到来と騒がれました。しかし、それが間違いであることが理解されるようになってきたと思います。子どもを産む年代になった女性が出産を迷った、というよりもその前提となる結婚を前にしてとまどったこと、すなわち晩婚化が原因です。日本は結婚しなければ子どもを産まない社会です。逆に結婚すれば子どもは二人、という社会でもあります。したがって、〇または二、これが現在の出生率低下の原因です。ちなみに日本の配偶者をもつ女性の出生率は今なお二・二の水準にあるとのことです。

ところで、日本の少子社会がスタートした六〇年生まれは来年の二〇〇〇年で四〇歳。現在の少子世代の親にあたる（なるべき）人たちこそ、模範的な人口政策の成功例として評価される二人っ子時代に日本社会がなった（変えた）後に生まれ育った人たちです。現在の二回目の少子時代の母親とは、自らもまた少子時代に生まれ育った世代です。その意味で、もし、現在の少子時代の母親のアイデンティティに問題があるとすれば、わが子との関係の前に、母としての自己形成過程を問う必要があると考えます。アイデンティティとは、自己のあり方を生きる場（生きてきた世界）とセットで位置づける概念だからです。では、どのような世界（生きる場）のなかで、現在の母親は自己形成してきた

のでしょうか。それが本稿のもう一つの課題である高学歴化です。

高学歴化がもたらしたもの

日本の戦後の教育施策の課題は義務化された中学校教育の実現でした。そのピークは団塊の世代の中学進学時でした。その後、子どもの数の減少に反比例して高校進学率が上昇し七〇年代半ばにピーク、すなわち九〇数パーセントに達します。日本に生まれ育ったほぼすべての子どもたちが高校に進学する時代になったわけです。七五から一五を引けば六〇。二人っ子時代の始まりである六〇年生まれが一五歳に達したときに高校進学率はピークを迎え、さらにその先も望むようになります。この世代から短大を含む大学への進学率は四〇%に達します。ただし、この後、出生数は団塊ジュニアに向かって再び増加に転じ、高校（県）は進学率保持（増設）を、大学（国）は進学者数一定（競争の激化）を選択します。ただし、短大の増設は進み、七六年に専修・専門学校が制度化されます。それに対して、進学を望む家庭の子どもは二人。高度経済成長時代を経て日本は豊かな社会になり、男女にかかわりなく、子どもを進学させる余裕ができました。その豊かな社会を創る方法が、義務教育修了者を工場労働者、高校卒業者を中堅技術者、大学卒業者をエリート、という学歴別の人材配分装置。戦後の工業化は、学校での成績（本人の努力）で自己の社会的位置を決定できる仕組みとともに進行したわけです。上位学校への入学可能性が、わが子の人生の方向を決定するなら、できるだけかなえてやるのが親心です。二人っ子への夢は、短大と四大という性差はあっても、大学進学者約四〇%、専修・専門学校を入れれば、同年代の七割近くが高校卒業後進学するという現実として具体化します。

さらに、それはかつては農家の嫁になる多くの女性が都市で核家族をつくる過程でもありました。

舅、姑、夫につかえ働き続け、その合間にしか子どもを世話できない嫁ではなく、家事・育児を専らにする主婦が理想とされました。専業主婦の誕生です。サラリーマンの夫の留守を守り、二人っ子の未来は自分の責任、これが専業主婦に共通する思いではなかったでしょうか。しかし、問題は育てられた側。いかに親の愛が深くとも、それが子どもにプラスかどうかは別問題。少なくとも、そのように育てられた女性が自分の子どもを産み育てることにとまどっていることもまた現実なのですから。

親の子どもの進学への夢は進学競争の激化として子どもに迫ります。それも男女を問わず、このことは女性の進学に関してはプラス面もありました。短大への進学というバイパスを経由して、女性の進学率は四大に進学する者を合わせると、八〇年代半ばに男子を上回ったからです。

このように六〇年代に始まる少子第一世代から女性の高学歴化が始まるわけです。それは性差ではなく自分の能力で自己の位置を決定できることがアイデンティティを構成する要素になることを意味します。その先には自己実現を最上位とする生き方が待っています。工業化から情報化の段階に入った八〇年代の日本社会が彼女らを迎えました。経済の拡大による求人不足と男女雇用機会均等法の後押しもあって、多くの女性が仕事の面白さと自由な時間と友人と金銭を得る喜びを味わいました。だがそれは自分が育つ過程で、母親になるためのアイデンティティを構成する要素を獲得する機会を失う過程でもありました。専業主婦として自分を育てる母への感謝は育まれても、三〇代後半にはその役割が終わり、新たな人生にとまどう母の姿もまたみることになるのです。二人っ子として学校中心に育つ過程には、自分の親以外に身近に子どもを育てる女性の役割を経験する機会はきわめて少なくなります。観念の世界で理想的な親を描けても、子育ての喜びと理不尽さの感覚の学習はできません。何よりも、成績を典型とする学校が要求する自己実現の価値のヒエラルキー（自分が努力した結果は

自分に返ってくる）のなかに、他者（子どもや夫）の成長（昇進）に自己実現の成果を委ねる生きかたは入っていません。すなわち、専業主婦の母のもとで学校中心に二人っ子として育った女性には、自己認定（アイデンティファイ）の対象に母として生きる自己像を定位する機会を得ないまま成人することが枠付けられているといえないでしょうか。少なくとも、母親像は職業人としての自分と並んで自己のアイデンティティを構成する選択可能な観念の一つ以上のものではない、といえないでしょうか。そしてもっとも身近なモデルとなる自分の母親の人生を通して、母として生きることのみでは自己の人生が終わらない現実をリアルにビルトインされていないでしょうか。

ちなみに、少子第一世代に先立つ団塊の大学進学率は男子で二〇～二五％、女子は一〇～一五％。その親は工業化が進む前の日本で生まれ育った人たち。専業主婦は少数派。貧乏人の子だくさんを支えるために働きつづける両親を横目に、兄弟姉妹や近隣の人たちに揉まれながら、学校の外でしか味わえない人生の理不尽さと快楽を経験しながら自己形成した最後の世代。ただし、団塊の世代がつくった家族もまた（家族こそ）、高学歴・少子時代の真っ只中。少子世代の母親と団塊の世代の母親の相違はどこにあるのか。この点にこだわりながら、改めて、妻とNさんの話に戻りたいと思います。

選択された母の先にあるものは

大学の後輩として出会った妻は、姉と弟にはさまれた次女。彼女が生まれた日、男ではないということから父親が仕事から帰ってこなかったことを根に持って（？）、男に絶対負けないと勉強と部活（テニス）にがんばる。その一方で、働く母親にかわって中三から家事を担う。おまけに、隣近所は親類縁者が一杯、その必然として静かに勉強できる環境はなく、屋根裏に自分の空間をつくり、受験

に備えたとのことです。念願かなって大学に入学、四年後に埼玉県の高校教師になったまでは計画通りであったものの、就職一年後に結婚した相手（私）が悪く、夫の赴任とともに退職し静岡に転居。それでも再び教師になる予定であったが、次々と子どもが生まれ、心ならずも（？）専業主婦となる……。少なくとも、高校や中学の同窓会でいつも妻に向けられる言葉は、あなただけは働き続けると思っていたのに、という評価。だがそれは妻が例外と思われていたからこそ得られる評価。大学に進学しキャリアとして働く女性が珍しくなければ話題は逆です。むしろ、仕事より母役割を自らの意思で放棄することの方がアイデンティティをゆるがす問題になったはずです。加えて、団塊ジュニアの母として出生数の多さは親の多さであり、頼りにする（口うるさい）先輩、後輩に不自由しません。人間関係の豊かさはアイデンティティの豊かさの基盤、子育て後の不安と不満は昼食時ではなく、仲間のなかで解消できます。「女のくせに」という言葉に奮起しながら、自分の道を開いてきた妻にとって、夫の赴任で移ってきた官舎の先輩・後輩と付き合うのに時間はそれほど必要なかったようです。

それに対して専業主婦を選択したNさんに失敗は許されません。だが仕事にはマニュアルと教える先輩がいますが、子育てはどうでしょう。団塊の世代が子育て過程で自然に創ってきたネットワークは、少子化第一世代には支援活動のために意図的に創る対象、おまけに二人っ子として大事に育てられた女性は、公園デビューと揶揄されるように仲間づくり自体にマニュアルが必要です。

農業社会に生きる母親にとって、子どもを育てる母の観念は自己像（アイデンティティ）の理想ではあっても現実ではありませんでした。それを現実化したのが高度経済成長とともに一般化した専業主婦です。しかし、それだけで子育て後の人生を支えるアイデンティティを維持することはできませんでした。後輩の団塊の世代は、多産世代の最後として人を産み育てることを自己の人生の中核に据

えましたが、やはりアイデンティティを維持できないことを知り、母役割終了後の人生を模索し続けています。そのまた後輩の専業主婦が一般化する過程で生まれ育った少子化第一世代は、母のアイデンティティ自体を選択の対象にし、史上初めて女性は結婚しない選択肢を手に入れました。ただし、それは先輩や親の世代よりも、母を選択した者に、より強く成果を求めることをアイデンティティの中に差し込むことでもありました。しかしそれは自己とは異なる存在を育む子育ての作業には馴染まない要素。よき母であろうとすればするほど高まる子育てへの不安と不満、それを感じる自己への責任、両者の狭間で先輩たちよりもより一層とまどい悩まざるをえないのではないでしょうか。

もっとも、この世代はいまだ子育て真っ最中。一方的なラベリングは控えたいと思います。ただ、伝統的とされる母親のあり方を女性のアイデンティティの中核に据えることは、理念の上でも事実の上でもさけるべきであることは間違いない選択と考えます。子育てに一生を捧げる心やさしき母の観念は、まさに観念であって事実ではありません。男が自分の母と妻に求めた幻想といった方がよいかもしれません。皮肉にもその幻想を理想に置き換えて誕生した専業主婦の現実が、二人の子どもの母役割では八〇年の人生を統合するアイデンティティの中核になりえないことを証明しました。

私たちは子どもを少なく産んで良く育てることを目指して高学歴化と少子化をセットで進めてきました。その結果、さまざまな問題はあるものの、曲がりなりに自分の人生を選択し創造できる豊かな社会を築くことに成功しました。しかし、その社会を担う新たな世代の創造には、成功していないと思わざるをえません。そのまさに中核に、新たな母親のアイデンティティの形成の失敗があるかもしれません。

それは父親のアイデンティティの形成の失敗であることもまた、いうまでもないことですが。

あせる妻を支えられる夫

国立音楽大学教授　斎藤浩子（さいとうひろこ）

はじめに

この三月、厚生省家庭児童局が作成したポスターが大いに話題を呼んだ。ポスターのモデルと惹句が人目を引いたのである。ダンサーのSAMさんが、妻の人気歌手、安室奈美恵さんとの間に生まれた赤ちゃんを抱いている写真も話題性があるが、その写真に大きな活字でつけられたキャッチフレーズ「育児をしない男を、父とは呼ばない」も、インパクトがあった。この惹句は、若い女性や育児現役の世代の女性たちには共感をもって迎えられたようであるが、眉をひそめた人たちもいたようである。このポスターに書いてある言葉は次のように続く。

「お父さんでいる時間をもっと。一日一七分、日本のお父さんが育児に当てている平均時間です。二人でつくった子どもなのに、これではお母さん一人で育てているみたい。妊娠や出産が女性にしか

3歳から15歳までの子をもつ

母親の悩みとあせり

1999年10月号臨時増刊

2 母親はなぜ悩み、あせるのか ——現代の子育てと育児不安をめぐって 東山弘子

12 母親のあせりは子どもに何をもたらすか 細井啓子

20 子育てに求められる母親の役割——「待つ」ことの大切さ 滝口俊子

26 高学歴・少子時代の母親のアイデンティティ 馬居政幸

35 あせる妻を支えられる夫 斎藤浩子

母親の生き方が変わった

43 専業主婦だからできること——あせりからの脱出法 永久ひさ子

50 働く女性たちの子育て術——あせらないですむ子育て観 川喜田好恵

57 多様化する家族と女性 河野貴代美

母親の悩みやあせりをどう解消するか

子どもが問題を抱えているとき

[幼児をもつ母親の悩み]

64 ○家族と夜遅くまで起きていて寝つかない
67 ○好きなものを好きなだけ食べる 佐藤暁子

71 ○食事やお出かけのときじっとしていられない
74 ○おどおどして、友だちとうまく遊べない 河村真理子

[小学生の子をもつ母親の悩み]

77 ○登校をいやがりはじめた
80 ○何度言っても整理整頓ができない 大野道子

83 ○勉強についていけない
86 ○友だちの持っているものを端からほしいとねだる 手塚光善

89 ○中学受験をさせたいが、塾に行くのは嫌だと言う
92 ○暴力を振るい、他の子に迷惑をかける 藤井和子

95 ○異性にいたずらして困っている 98 ○ゲームに熱中してばかりいる
101 ○感心しないグループの子たちと遊ぶのをやめさせたい 金澤広明

[中学生の子をもつ母親の悩み]

104 ○小遣いをせびってばかりいる
107 ○成績が振るわず、志望校に進学できるか心配 髙橋早苗

110 ○時々、買ってやった覚えのない高価なものを持っている
113 ○親に暴力を振るう 神谷元子

母親自身が抱える問題をどう解決するか

116 ○しつけと愛情のどちらを優先すべきか
119 ○子どもに「仕事をやめて」と言われた 岡本淳子

122 ○子育て仲間がほしいのに身近につきあえる人がいない
125 ○子どもがかわいいと思えず自己嫌悪に陥る 青木紀久代

128 ○子どものことをすべて把握しないではいられない
131 ○自分の居場所や時間をもてず、イライラする 伊藤とし子

家族の問題をどう解決するか

134 ○鍵っ子には、どんな配慮が必要か
137 ○子どもの進学をめぐって夫と意見が合わない 両角登士子

140 ○祖父母が子どもの教育に口をはさむ
143 ○社宅にいてわが子と上司の子の関係が難しい 長谷川深雪

146 ○離婚したいが、子どものことで踏み切れない
149 ○夫が子育てに協力しない 土佐いく子

担任教師とのかかわりをどうするか

152 ○子どもへの指導に不満がある
155 ○自分勝手でわがままといわれた 宮本一史

158 ○クセのある子で十分に気を配ってほしい
161 ○いじめへの対応に不満 沼澤政司

164 祖父母は孫の教育にどうかかわるか 藤井チズ子

172 保護者面接のときに教師・スクールカウンセラーが気をつけること 室田洋子

178 カウンセラーが母親にできる心の援助 三浦和夫